

末松謙澄の師 村上仏山を巡る人々

はらこしよ
原古処

文政七年（一八二四）十五歳になった村上仏山は、筑前秋月（朝倉市）へ遊学に向かった。秋月をめざしたのは、そこに原古処という名高い漢詩人がいたからである。

原古処は秋月藩士手塚甚兵衛の二男として明和四年（一七六七）に生まれ、十六歳で秋月藩の藩校稽古館教授原坦齋たんさいの養子となった。十八歳で福岡藩の亀井南冥なんめいの門に入り、南冥から「詩文の才能は自分以上」と評された。

秋月に戻った古処は、寛政十二年（一八〇〇）三十四歳で養父の後を継ぎ稽古館の教授に就任。文化二年（一八〇五）には藩主の許可を得て、私塾「古処山堂」を開設した。その後藩の要職に任じられ、藩主の参勤交代にも随行。江戸で諸国の文人墨客と交流するなど、充実した日々を過ごした。しかし文化九年（一八一二）、親しくしていた家老の失脚などから、古処は稽古館教授や藩の役職を失うこととなる。

翌年、古処は長男瑛太郎（白圭）はくけいに家督を譲って四十七歳で隠居する。

その後は九州や中国地方を旅し、広瀬淡窓たんそうや頼山陽らいさんようなど文人たちとの交わりを深め、悠々自適に過ごした。旅には娘の猷ちち（采蘋さいひん）をはじめ家族をともしなうこともあった。

仏山が古処の門を叩いたのは、古処の晩年でそろそろ六十の歳を迎えようとする頃であった。入門した仏山は古処を慕い、古処もまた仏山の詩才を愛したが、文政九年（一八二六）の年末に古処が病に倒れたため、仏山はやむなく故郷の上稗田に帰った。翌年の一月、原古処は六十一歳で世を去った。

「古処」の号は秋月城下から仰ぐ「古処山」からとったものである。村上仏山もまた家から望む「仏山」（御所ヶ岳）を号とした。師の古処にならうてのことであろう。また仏山は水哉園で、毎年古処の忌日に詩会を開き恩師を偲んだ。

（末松謙澄顕彰会 小川秀樹）



斎藤秋圃画『原古処像』
朝倉市秋月博物館蔵
※画像の無断複製を禁止する。